天と地は汝の與へたる命令に從ふ。彼等は汝の彼等の爲めに設けたる道を通りて旅し、彼等は汝の彼等に命じたる路及汝の彼等に開きたる路を違ふことなし。…汝は休む、而して之れ夜なり。汝の眼輝き出づる時我等照さる。オヽ我等をして、空を揚げてヌトの胸の上に船艦を浮はしむる神に光榮を與へしめよ、Nut(ヌト)は諸神と人間と彼等凡ての子孫とを作りし者なり、凡ての陸と國と大海とをば『地をしてあらしめよ』てふ彼の名に於て作りし者なり。…日ごとに生み出さるゝ赤兒、如何なる路をも超ゆる老者、達し得べからざるの高さ。」

次のは Thebes(テバス)の大神 Amon(アモン)に献げたる讃誦の拔萃である。之は Bulak(ブラク)博物館の所藏中にあつたもの。

汝を祝福す、アモン、ラーよ、地の王位の主よ、一天の老者、地の最古者、一切存在の主、諸物の支、萬物の支、彼れの作品中の一つ、諸神中の唯一、諸神中の美牛、凡ての諸神の首、眞理の主、諸神の父、人の作者、動物の作者、草の作者、家畜の養育者。プターより生れたる善き力、プターには諸神幸榮を歸す。…最も光榮ある者、恐れの主、己れの像に形どりて地を作りし者の首、彼れの思想は何れの神にも勝れて、如何に大なるぞや。汝を祝福す、ラーよ、眼に見えぬ堂に住める法の主よ、諸神の主よ、命じて諸神を作らしめたる船中のチエプラ、人間の作者 Atmu(アトム)…彼等に生を與ふる…惱める憐れなる者に聞き彼の泣く時心のやさしき…賢き(サガシ)格言を與へ、意のまゝにナイル河を溢れしむる智惠の主來りて人間を活かす最も愛すべき慈悲の主、天空より進み來りて各の眼を開く者、樂と光とを起す者。諸神は彼れの善を悅び、彼を見る時彼等の心蘇る。テベスにて拜まるゝ、Obelisk(オベリスク) (Heliopolis(ヘリオポリス))の家に高く冠せるオヽラーよ生命と健康の力の君よ、凡ての諸神の君主よ、地平の直(ガタ)中に見らるべき者、過去の時代

と下界の支配者、彼の名は彼の被造に秘めらる……汝、多くの手を持てる一つ唯一つの者を祝福す。汝は凡ての人間の眠れる間覺めて、其被造の中の善者、卽ち萬物の支持者アモンを求め出さんとす。地平のトムとHorus（ホルス）は言を盡して汝を恭敬す、汝を祝福す、汝は我等の內に住へばなり。汝を拜す、汝は我等を造りたればなり。

次のは Reneses（レメセス）二世の祈禱である。かやうな祈をする王樣は餘り多くはなさゝうだ、

「然らば汝は誰ぞや、オヽ父アモンよ。父にして其子を忘るゝことあるか。汝の意に逆ふ者には憐なる運命こそ慥かに待てるなれ。汝を知る者は幸なり。汝の行は愛の充てる心より出つるなればなり。我汝に請ふ、オヽ父アモンよ、我の未だ知らざる多くの民の中に在る我を見よ。凡ての國民は我に反して結び而して我は獨なり我と共にする者はあらず。我の多くの兵は我を捨て、我の騎兵の中一人の我を求むる者あらざりき。我彼等を呼びし時、我聲に耳傾けたるは一人もなかりき。されど我は信ず、アモンは百萬の兵よりも、十萬の騎兵よりも、一萬の兄弟と子とよりも、彼等盡くを集めたるよりも、我には尊きことを。多くの人間の所作は空なり。アモンは彼等を服從せん。」

次のは Ptah-hotep（プタホテプ）の書中のものであるが、此書は世界最古の書と稱せられてゐる。パリの博物館にある此書の原稿が果してモーゼ出誕前數百年に於て誌されたものとせば、世界最古に相違ない。但し、もしそうだとすると此記者は埃及第五王朝 Assa Tatkara（アサ タトカラ）王治下の人となるのである。

「汝若し賢人ならば、汝の子を神の愛の中に育てよ神は從順なる者を愛し不從順なる者を憎む、善き子は神の賜なりと云はる」と。

又 Ani の格言の中には次の言がある。

「神の殿は言多き發表を恐る。愛の心もて、言葉密やかに、遜りて祈れ。彼は汝の事業を護らむ。彼は汝の言に聽かむ。彼は汝の献げを受けむ。」

「世界の神は蒼穹の上の光の中にあり、彼の徽章は地上にあり、毎日拜まるゝは此等なり。」

最後に、所謂「死者の書」なるものを掲げやう。

「我は一つの小兒を殺したる事あらず。一つの寡婦を虐げたることなし。一つの牧者を虐待したることなし。我の日(生存中)には一つの乞食あらざりき。我の時何人も飢へざりき。饑饉の年の來れる時、我は國の南北の境迄凡ての田地を鋤き其住民を養ひ彼等に食を供したりき、其中に一つの飢ゆる者あらざりき。而して我は寡婦をば恰も其夫あると等しからしめき。

又他の刻文には

「正しき事をなし惡しき事を憎みて、我は飢ゆる者にはパン、渇く者には水、裸なる者には布、乏しき者には隱家なりき、願くば我の彼になしたる事を大神は我になし玉はんことを」。

等、いくらも〳〵出せば切がない。此位にしてをく、兎に角、埃及古文學の研究は日に盛である。若し眞の學者的精神を以て之を續けてやつたならば埃及は向來宗教學者に取りての無盡の寶藏の一つとなるであらうとは私の疑はない所である。

さて是から、アフリカの黑人共の觀察に移らう。晩近、其言語及宗教に就て研究をした人々は僧正 Colenso、同 Callaway 博士 Bleek、同 Hahn 此等何れも信憑するに足る學者である。殊に Bantû 族に關しての研究が多い、此種族は東岸から赤道を超へて喜望峯に至る一帶の地を占め

てゐる蠻人である。今日も尙明白でない事柄も隨分ありはするが、彼地に居る宣教師等が何れも大抵彼等を稱賛して居る事は特に吾人の注意を價するのである。今日續々耶蘇教徒になる者がありさうで其實甚少ないが、別に怪しむべきでもない。カラエー氏によれば、若い時英軍の砲擊を實地に經驗した所の土人の一老婦が其子等に曰ふには、天地を震憾する程の事をする者は何事に於ても誤る筈がない。宜しく彼等の宗教にも歸依すべきだと。されば弘教の望は十分ある。併しカラエー氏は直接傳道よりも寧ろ他の方法を採りて學校教育を盛にするやうと勉めて居られる。蓋し氏の說に以爲らく、基督教は未開の人心よりも開化の人心に於て榮え易いからだと。氏に信服してゐる一つのズル人が氏に謂て曰ふには、「天に御座す王様」の事に就ては君等白人から始めて聞くといふ譯ではない。夏日雷鳴の際には私等は「王様が戲て御座る」と云ふてゐます。そうして若し誰かビク〳〵怖がりでもすると、年老いた人達が「ハア、貴様は王様に屬してる物を何か食つたな」と云ふ。私共小さい時分には度々こんな言葉を耳にしました。其時年寄連は天の王様を指しするのが御定まりでした。併し其王様の名は聞きませんでした。只王様は高い所に御座ると云ふことを丈覺えて居ます。而して此世界を御創造なすつた者（Umdabuko）は其高い所に御座る王様であるとも聞きました」と。又

嘗て之も矢張り高齡の土人の女の話しに、

『私共が穀類の起原に付て尋ねたことがあります。穀類は一體何處から來たのでありませう」と云ふと、老人は「それは萬物を御作りなされた造物者から來たのだが、我々は其造物者を知りはしないのだ」と申す、それて、私共は續いて「其造物者は何處に御座るのか、酋長様には、我々はよ

く御目に懸るではないか」といひますと老人は頭を掉て「我々の見た酋長様も亦造物者が御造りなされたのだ」「そんなら其造物者はどこに御いでになるのか、我々はちつとも御見掛申した事がないではないか」と問ふと、老人は天を指して「造物者は天に御いでになる。そうして、其處には一つの國があつて民が住んでゐる」と……又「彼は諸王の王である」などゝは常々父上が語られた所であります。又こんな村(卽ち雷に打たれた村)では人々が「天が家畜を御食べになつた」「王様がこの村から家畜を御取上げになつた」などゝいふて居るのを屢耳にしました。又雷が鳴る時はナアニ王様が御戯(アンビ)して御座るのだ」と人々は申して、心を强ふしてゐました』。

次のは Amatanja(アマンタンジャ) 種族の一老人で Utshaka(ウトシャカ) の戰で負けて四つ手傷を受けて其痕跡(キヴアト)かまだあるといふ、其長老の物語りには、

『我々共先祖代々の信仰はこうでした。父や祖父が申しますに、「Unkulu(ルンクル) と云ふ地から生れ出た男がある」と。又常々彼等は「天に一つの王様がある」と云ふていました。又雷が鳴つたり、霰が降つたりすると「王様が武裝してゐられる。王様が霰をふらさうと思召す。萬物に秩序を御授けになるのはアノ方だ……一切生類の根元はアノ方の外にはない」……又「生物の源 (Umdaoko(ウムダウコ)) は上にある。それが人間に生命を授けるのだ」とか又「雨は王様から來るのだ、太陽も彼から來たのだ。又御月様―人間が夜道を安全に歩めるやうと白い光を御授けになる御月様も亦彼から來たのだ」などと常々云ひ聞かされました。又雷が落ちて家畜が死んでも人々は困まつた顏もしませんで「王様が自分の爲めに、自分の所有の食物の中から御殺しになつたのだ。元來家畜は御前達の者でない、皆王様のものだぞ。王様は腹がすいたから、自分の爲めに御殺しになるのだ」

と云ひました。若し又一村か雷に打たれて牝牛が殺されることがあると、此村は是から榮えるだらう」と云ひ、若し打たれて死ぬる人間があると「王様が彼奴(キヤツ)を御叱になつたのだ」と云つて居ました」。

造物者の一名は Itongo(イトンゴ)（靈の義）とも云ふそうだ。次のも矢張り一土人の話、

「イトンゴとは死んで又後蘇(ミガヘ)つた人間をいふのではない。人間と家畜とを支へ保つ所の地の支保者を云ふのだ。支保者とは我々の生活してゐる地を云ふのである。之によりて我々は生活することができる、之がなくては生存し得られぬ、之によつて我々は存在してゐるのである」以上カラエー氏「ウンクルンクル」に據る）と。右いくつも土人の談話を擧げたが、是に依りて見れば、何等宗教的生活もなく宗教的觀念も有てゐないと思はれてゐる所の此等野蠻人と雖尚、不可視的の神があつて萬物の作者で、天空に住して居て、雨や霰や雷を送つてよこし、惡人を罰し又山上の家畜の中から供犧を取つてゆくとほどの事は信じて居るのである。

序に一言するが、宗教を觀察するには餘程注意を要する。試に一つの支那人か又は印度人が我英國へ來て石炭つゝき輩の談話を聞いて國へ歸つて、そして英國人の信仰は是の如き者なりと報告するとしたなら、吾人は如何なる思をなすであらうか。かくの如くにして採集した材料の中の「神」なる語はどんな意味の者だらうか。英人や獨逸人が嘘(クサメ)すると「神汝を祝福(ユーニフドブレス)す」と云ふが、其中の神以外の者ではあるまい。カラエー氏がズル人に就て調査をやつた時、最初に知り得たる神名は此類のものであつた。Uilkxo(ウヰククソー)てふ神名は恐らく宣教師が彼地へ渡てから出來たものだらうと思はれたので、氏は之をさる土人に尋ねると其答へに「否ウ

チククソーといふ語は英人から教はつて始めて知つたのでない。昔から我等の用つてる言葉だ。人が嘘する時は、「願くば、ウチククソーは我を永久に愛顧せられんことを」と云ふのが常である、此ウチククソーはウンクルンクルの爲めに隱されてしまつた。で、今は何人も視ることはできない。人々はウンクルンクルを萬物の創造者だと云ふが、夫れはウンクルンクルを作つた所の彼を人々は見得ないからだ。ウンクルンクルを神だと云ふのも夫故だ。……』

さて吾人は上來、未だ何等の確定的信仰に達してゐない所の蠻人共に就て述べたが、今茲に、丁度之れとは反對の極端の者、即ち、もはや何等の確定的信仰に執着しない底の標本を出そう。

左に掲ぐるのは、Faizi（ファイジ）と云ふ人の言葉である。氏はアクバー帝の顧問 Abulfazl（アブルファズル）氏の兄弟であるが、思ふに氏の如きは當代にありては異端外道と排斥せられ而かも後世からは聖人、殉教者（マーター）、地の鹽、世の光などと稱賛される類の一人であらう。即ち眞の信、同類に對する眞の愛、眞神の信仰を持せる人で、其所謂神は不可言說、不可思議で、而かも眞の信者の胸中に永久に存じてゐる所のものである。

「フ、アイジの Diwân（デワーン）を以て、千の宗派に屬する自由思想の驚くべき發表の例證とせよ、

我は塵となれり。されど、人の、かゝる塵より起らんことは我墓の香にて知られん。

ファイシの終は始より知られん。彼は仲間なしに世を去り、又仲間なしに起つ。

過去の事、許されんと云ふなる復活の日の會議には Kâbah（カーバー）の諸罪は基督教會の塵の爲めの故に許されん。

1、「フ・ア・イ・ジ」には又心胸（ハート）の義あり、

2、回教の所謂罪は基督教の所謂塵と同樣無價値なり。復活の日に於ては回教徒も基督教徒も同じく其教義の無益のものなることを見るならん。地上に於てこそ人は宗教に就て異同の爭もすれ、天に於ては唯一つの眞宗教、即ち、神靈崇拜あらんのみ、との意なり。

オヽ、永久より存し永久の間存する汝よ、眼は汝の光に耐ゆる能はず、讃美は汝の完全を言表はす能はず。

汝の光は理解力を溶かし、汝の榮は智惠を誑かす。汝を考ふれば徒らに理性を損壞し汝の本體は思想を混亂せしむ。汝の靈性は宣言す、汝の智識を探らんとするも人間の冥想の血滴（ナシボ）の徒らに繻（コボ）し去らるヽあるのみと。

人間の理解力は塵の一元子に過ぎず。

汝の戸の番人たる汝の嫉妬は、人間の思惟の面を擊て凹（へこ）ましし、人間の無知の背頸に掌打を與ふ。

科學は、汝の完全へ達せんとする途上の砂漠の砂の如く人目を盲にす。文書の町は汝の智識の大世界と比して一小村なるのみ。

我足は、聖賢だに迷ふ此道を旅するの力なし、此酒の香に耐ゆる力なし。此酒我心を亂す。

人の所謂先見も理性の案内も、汝の榮の町に入りては只眩（めくら）みよろめくのみ。

人間の智識と思考と相合して僅に、汝の愛のいろはの第一字を綴り得んのみ。

知識に於ける初學も先進も共に汝に合一せんと熱中す。さはれ初學は空談するのみ。先進は戯言するのみ。

何人の腦も汝を捕へんとの考に充つ。プラトーの眉も此望なき考への熱を以て燃えたりき。

汝の嫉妬の刃は聖賢の肝臓をだに刺す。我如き無知の者いかで成功するを得ん。オヽ願くは汝の惠は我腦を清め玉はんことを、さらずば我不安は狂に終るべければなり。

汝の閾(シキミ)の塵に額(ヌカ)づき、さて後、汝を仰ぎ見んとするは、是れ信に於て正しからず、はた眞理の許さゞる所なり。

オヽ、人よ、肉と靈の二重の印ある貨幣の汝よ。我は汝の如何なる性質の者なるを知らず、汝は天よりも高く地よりも低ければなり。

汝の身には天界の像と下界の像とあり。天のをか地のをか、撰むは汝の自由にあり、

汝の理性に背いて行動するなかれ、理性は信用すべき相談相手なればなり。汝の情性(ハート)を妄想に被(キ)するなかれ、情性は嘘(ウソ)いふ愚者なればなり。

汝若し「自己の安寧よりも他者の夫れを撰め」との語の秘義を解せんとならば、毒を以て己れを、砂糖を以て他者を遇せよ。

汝若し民の仕ふる彼れに仕へんとならば喜んで不幸を受けよ。

希臘の智海に浴したる我は再び印度の深淵より起てり。汝は嘗て此深洞(我知識の)に陥りたることある如かれ(我に鑑みよとなり)

人若し我知識の面より蔽(オホヒ)を徹せば、知識に於ける先進が確實と稱する所の事も、我には最も微(カスカ)なる思想の曙なるを見ん。

人若し我知識の眼より遮りを拂はゞ、賢者が天啓(恍惚的知識)と思へる事も我には唯の酔狂なるを見ん。

我若し我心中の物を持出し得んとも、我は時代の眼之に耐ゆるやを危む。

我の器は、時の友誼の酒を要せず、我自らの血は我熱狂の酒の基なり。

私は古への諸宗教を研究するには宜しく此精神を以てせんことを願ふのである。何となれば研究を積めば積むほど、世には全く僞なる宗教てふものゝないことが愈々明に感ぜられるからである。否或意味から云へば、各宗教は何れも唯一の眞宗教である。各時代の思想、言語、感情に適合せるものである。其時代に於て可能なる唯一のものである、と云へば或は難して曰ふであらう。果して然らば、かの小兒や娘を火で焚いて供物にする所の Moloch（モロク） 崇拜でも眞宗教であるか、神聖なる殿堂内に淫猥を事とする所の Mylitta（ミリタ） 崇拜や Kali（カーリー） 崇拜でも眞宗教であるか。はた又德行と冥想を積んだ其最後の褒賞として靈魂の滅盡を標榜する所の佛教の如きも眞の宗教なるかと、アヽ是れ豈眞摯なる議論ならんや、是只黨派的私爭なるのみ。此論法で云はゞ、此說を駁するに骨は折れん。三位一躰說を奉ずることを屑しとせず、マリヤや聖者崇拜を頑然として排斥したる千古の賢人を、刑もあらうに燒殺したのは何宗教であつたかそれが眞宗教と云へるか。寺院の聖なる壁の後に淫行を隱してをいた宗教は眞宗教であるか。或時期に於て懺悔しない罪人は免赦若しくは救濟の道は絕えて只永久の刑罰あるのみと宣言した宗教は如何であるか。

アヽ此論者流の精神を以て宗教を研究する者は、私は斷言する、かゝる輩は其眞目的を達して神聖なる淵源に到着することは永恒其期あるべからずと、論者の云ふ所の事の如きは何れの宗教にも附隨せる弊

害である。宗教の排泄物である。避くべからざる排泄物である。かゝるものを見て宗教を批判せんとするは、病院を見舞つて其全國民の健康を、凡て皆是と判し、獄舍を訪ふて其全國氏の道德を評せんとすると異ならない。吾人若し眞に宗教を知らんと欲せば、其創立者の胸中に立入りて之を求めんければならぬ。それができなければ、靜寂なる書齋か但しは病室に是を尋ねるがいゝ。賣卜者の群や僧侶會議に求めてはならない。吾人若し宗教は理知の能力に從つて應化するものだと心得て、それを胸に持つて宗教を觀察すると、迷信僞教と見ゆる所にも尙眞宗教の存してゐることを發見して驚される事は甚屢であらう。

宗教の目的は何處に於ても神聖である。如何に劣等宗教でも必ず人間の心を神の前に据へるものである。勿論下等な宗教の神の觀念は不完全である、併し如何に不完全なるにせよ、それは其當時の人心が捉へ得る所の至高完全の理想だ。宗教はかゝる理想の前に人心を置いて、之をして其日常の善の水準以上に引揚げる。少くとも一層高等なる善良なる生活を渴仰せしむるものである。

古代の宗教觀念及宗教感情の發表は甚だ小供らしいもの、否時としては不敬で忌むべきものもある。されど小兒の舌のまはらぬ片言は親は慈愛を以て聞き分けてやらねばならぬ。人類の小兒期に就ても亦同樣である。小供の言語は無邪氣なもので、其不敬處もさほど不快を感ぜしめないものだ。ある時、さる小兒が「オヽ私しは唯一人で遊んで神樣の御覽になることができないやうな房(へや)が、澤山とはいはぬ只一つでいゝからほしい」と云ふたのを私は聞いて、かの David(ダヰツド) の讃歌中の「何處に行けばや、我は汝の靈を避け得まし、何處に行けばや我は汝の眼より逃れ得まし」よりも遙に切實に愛ぐるしく感じて惡氣(ニクゲ)はそれほどしなかつ

た。

が、古宗教の言語も此通りで、ある。今日でこそ吾人は事もなげに神の「遍在」だとか「全智」だとか云ふてゐるけれど、昔はをかしい事をいふたものだ。ヘシオドは、太陽をば「萬物を照覽するゼウスの眼」だと云ひ、Aratus（アラタス）は「凡ての町凡ての市はゼウスに充てり、海も港も　…。我等も彼れの子孫なり」と書いて居る。又エーダの一詩人はヴルナに就て左の如き言を述べて居る。（但し此句はヴシスタよりも後代のものである。）

「此等の世界の大なる主は、恰も直傍（チキヲバ）にある如く見玉ふ。人若し自ら密かに歩みつゝありと思はんも諸神は凡て之を知り玉ふ。若しくは立ち若しくは歩み若しくは乘らんとも、若しくは寢ねんとし若しくは起きんとすとも、二人の者相座して囁語（サヽヤク）を王ヴルナは知り玉ふ。彼は第三者としてそこにゐますなり。此地も亦主なるヴルナに屬す、此廣き空も其遠き極（テ）までも。二つの海（空と大洋）はヴルナの腰なり。彼は此水の一小滴の中にも含まれ玉ふ。空を超えて遠く去らんとする彼、彼さへもヴルナを逃るゝ能はじ。王ヴルナは天地の間にある者及彼方（カナタ）にある者の凡てを見玉ふ。彼は我等の瞬（マタヽキ）を數へ玉へり。戲者其骸子（サイ）を投ぐるが如く、彼は凡てのものを定め玉ふ」と。此等の言は或は神の威嚴を傷けるかの如き所もないではないが、そが三千餘年の古しに於てできたものと思へば吾人は寧ろ其純潔と深遠とに驚ざるを得ないのである。

嘗て印度人で基督教に歸した者が私に語つて曰ふには、私は國に歸つて、國の人に向つて、凡そ新舊二約書以外の言語は一切無意義である、などゝ主張して彼等の感情を害しやうとはさら〳〵思はない。寧ろ印度の哲學者詩人さては道德家等の言行に訴へて、夫等を我光で照らし基督の精神を以て彼等と論究しやうと思ふ。近い一例を擧ぐれば、印度

人の諺に「最大たらんと欲する者は最少ならざるべからず」と云ふのがある。之は決して無意義(ノンセンス)でない。耶蘇は「汝等の長たらんとする者は汝等の奴(シモベ)となれ」と云ふて居る。埃及へ行けば美しく刻んだ石の斷片が殘つて居る。之を見れば當時の大建築が彷彿し得られる。印度に行て、人民の通常の言句を調査すれば印度の宗教は如何に壯大なものであつたかゞ分る云々」と。

この事は又同じ名の北米の印度人に付ても云ひ得られるのである。(但し二者の宗教思想は霄壤の差はあるが)。面白い話がある。最初彼地に赴いた宣教師は土人が汎神思想をもつてゐるのに吃驚したと云ふ事だ。其仔細如何と云ふに、Roger Williams(ロージャ、ヰリヤムス)の云ふ所によると、印度人は英國人の船、大家屋、書籍、文字、耕作などを見る毎に、'Manittowack'(マニートーワック)(彼等は神だ)とか或は、'Cunmanittoo'(クムマニター)(汝等は神だ)と云ふたそうである。如何にも汎神觀である。併し此汎神觀は、近來の言語研究によると、彼等の思想の發達から生じたのではなく、全く彼等の言語の曖昧的性質に由來してゐるのらしい。案ずるに Manito-manit. 複數 Manitoog が最上神の義をもつてる事は疑はれない。Lafontaine 氏は「理解力を超越して、其原因の知り得られざる一切の者」と解してゐられる。併し此 Manit てふ語は、Dyaus 又は Zeus の如く元來は天空、太陽等の自然現象の名から出て後に Deva 又は Deus の如く、神聖なる者の名となつたのではない。若しかの語學者等を信ずべしとせば、此語は最初から抽象的觀念の名であつたのだ。即ち Anit は「超越する」などの義の一つの働詞の假定分詞(サブジャンクチーブ、パーチシプル)で之に接頭語(プレフィクス)がくつついて Manit となつたので、而して、Anne(アネ)は同じ働詞の非人形(指定現在(インヂカチーブ、プレセント))で「より多く」又は「寧ろ」の義である。然るに印度人は最上神を Manit と稱するのみならず、男女、禽獸、蟲魚等の卓越せる者に接

する時は何時もManitてふ語言(コトバ)を發するので、此際は「過度」「異常」「奇怪」等の義をもつてゐるのである。最初の宣教師等を驚かした時のManitは實は此意味であつたのだ。此語の此二樣の意味は印度人の心中には常に並存してゐるであらう。若し然りとせば之は、言語が思想の上へ與へたる感化、若しくは化石せる思想が活ける思想の上への感化の一例である。但し此場合は多語一義(Polynomy(ポリノミー))から來たのではなく一語多義(Homonymy(ホモニミー))から生じたのである。兎に角「是は(ヂス、イス)Manit(マニット)だ」と云ふのと「是は(ヂス、イス)Divine(ヂヴイン)だ」と云ふのとは結果に於てはツマリ同じであるけれど、ヂヴインは天空の義のDyausから出たのだしマニットはそんな起元のものでないから、兩者は其過程に於て異なつてゐるのである。

實に、古語を取扱ふのはむづかしい、殊に宗教に關して然り。抽象的觀念は比喩によらなければ發表し得られぬ。古宗教の語彙は殘らず比喩から出來て居ると云ても過言ではない。今日の吾人は空(ソラ)を考ふることなしに天を、放免を考ふることなしに宥恕を蔽(オホヒ)を考ふることなしに啓示(レーション)を考え得るが、古代人には中々できなかつたのである。古代語に於ては以上の諸語は勿論のこと凡そ感覺的事物に關せざる語は盡く中間段階にぶらついて居る。精しく云へば、其類の語は何れも半物的、半心的であつて、唯〻語る者と聽く者との能力に應じて其何れの方面かゞ或は高く强くなり、或は低く弱くなるのである。此事は實に古代の神話及宗教に存する凡ての誤解の源泉であつて此源泉は萬古に涸るゝことなきものである。凡そ宗教の生長發展には二箇の相反せる傾向が行はれてゐる。人心は、一方に於ては、言語の物的性質に反抗して其硬き皮殼を破り、向上して之を抽象觀念に適合せしめようと勉める。他の一方に於ては、茫漠として通し難き抽象的意義を、捕(ツカマ)へ易き俱象的のものに調

攝し緩和し、高遠なる心的を、卑近なる物的に引下さんとする。宗教の言語には絶間なく此二作用が行はれてゐる。此動反動の趨勢は太初より存し現今に於ても尙見らるゝ所のものである。

人間の思想上の此進退二潮動は各の時代に於て、父と子との間、母と娘との間に行はれ、如何なる宗教も免れ能はざる所であるか、一見して宗教を破壞せしむるの恐があるやうである。けれども仔細に觀察すると、中々、かゝる進潮逆潮其者が宗教の眞の生命であるのだ。試に空(ソラ)を拜むで居た人間等の位置に我身を置いて考へるがいゝ。「空を拜す」とか、或は「空は神なり」と云のは之れは或意味に於て眞である。併し我々が今日所謂神の意味で云ふならば、かゝることは不可能である。思想及言語の初期に於ては、吾人の今日云ふ意味の神や或はデウス、ゼウス、デーヴ等の如き一般的賓辭は決して存して居なかつた、又存し得なかつたのである。古宗教を解せんとならば先づ古語を解せんければならぬ。凡そ言語の最初の材料は何であるかと云へば、感官を通じて受け納れたる印象より外にはない。夫故に「燒く」「光る」「溫むる」などの意味の根語は太陽や空を表はす名として用ゐられることになるのである。

然るに今翻つて空の名が其物的の對象から引離されて、空とは全く異なれるものゝ名となる迄の間の心內の過程を想像して見ると、抑も人間の心內には最初から、自分は不完全な者、脆弱なもの、依屬的のもので自由な者でないといふ感じが存して居る。此感情は恰も、小兒は何故飢渴の欲を感ずるかと云ふと同じく說明すべからざる原的事實である。最初より存し而かも今も現に存して居るものである。人間は何處から來たのであるやら又何處へ去るのであるやら、自ら知らない。憐れな迷ひ子である。そこで彼は一つの案內者かほしい、一つの友達が欲しい。

彼は己れの信頼し得る或者を求める。天にある父の如き或者を要する。彼は外界より來る諸種の印象の外に、內面より來る强き一つの衝動、一つの欲望、一つの渴仰を有て居るのである。他の一切の諸物の如くに流轉することなく、過現未を通して其存在を保ち、萬物を支持し、恰も異域の如き此世界の直中に於て之に對すれば人をして宛然故鄕の思をなさしむる底の或者を要求するのである。而して此或者に對する漠然たる渴仰が、定まつた形を取る爲めには一つの名が必要となる。卽ち、其者に名を附けなくては十分明瞭に之を把捉し得ぬのである。然らばどんな名を選んだがよからう。當時、言語の貯蓄は乏しくはなかつたらうけれど、其何れもシックリ適合するやうなのは一つもない、其思想に自由と光明を與ふるに足るものは一つもない。どころか却りて其多くは其思想を束縛し暗昧にせんと擬するのである。けれども兎も角、終に、一个若しくは數个の名が選定された。此等の名は不完全であつたに相違ない。併し不完全ながらに幾分の滿足は得られたであらう。けれども、畢竟するに、心中に橫はれる廣大無邊のものゝ只の一部分の記號に過ぎない。かの「光れる空」てふ名は何れの國民も何れかの時必ず用ゐたと思はれるものであるが、此名が採用された時、之れは心內の無限者を遺憾なく十分に言ひ表したる名であつたとは思はれない、之によりて十分の滿足が得られたとは思へない。天空其者が神と認められたのであるとは決して〳〵思はれない。人々は目もて見らるべき天空の何たるかを現によく知つて居るので、而して名の發見者も夫が到底失敗であつたをよく知つて居るのである。が唯、かの光れる空は最高のもので、唯一のもので、不變で、無限であるから、かの無限者に名を貸し得る者は之の外には一つもないのである。だから已むを得ず其名を附けたのである。發

明者は決して此現に目で見てゐる所の青き空を其神と同一物と思ふたのではないことは明である。

今此空てふ名が與へられ、而して人々に受けられたる際、如何なる事が起り來るであらうかを考へて見るに、先づ之を發明した者は男らしき人、詩人、豫言者等の類に相違ない(創世紀第三十二章のヤコブ(マンリー・マインド)が神と角力(スマヒ)する譚は、神の觀念を捉へ之に適當なる名を發見せんとしたる努力煩悶の比喩である)。然るに此名が幼者、老人、愚民老婆間にも弘まつて彼等の勝手の使用に任ぜらるゝに至れば、必ず誤解が起てくる。之を防がんとするも到底不可能である。乃ち向下的運動が始まる。其第一歩は天空を、かの實在者の居所と見做すことである。第二歩は名の背後の實在者は全然忘却されてしまひ、天空其物を拜み或は之に雨を祀り或は日々の糧を乞ふやうになる事である。最後には、可見的の天空に關する事柄が、其同一名を有する者へ遷し附けられて種々の物語が發生して來て眞神の痕跡は堙滅せられて仕舞ふ。

此種の誤解を稱して宗教の言語(ザヤレクチカル、グロース、アンド、ザケイ)的盛衰若しくは言語的生命(ライフ)と云ふべきである。宗教の言語には此種類の變態變様は實に無數であつて、以て、啻に宗教の盛衰のみならず、宗教の生命をも解釋し得られるのである。Jacob Grimm(ヤコブ、グリム)氏が嘗て、南北獨逸語の別、サンスクリットとプラクリットの別、及ドリヤ語とイオニヤ語との別の生じたのは全く、男子の言語と女子及小兒の言語との差から起つたのであると論じたが宗教の言語にも又同樣の並行的流脉が見得られる。宗教の言語にも高等なのがある下等なのがある。廣いの、狹いの、大人に適するの、小兒用の、僧侶用の、俗人用の、喧しき市井間の、靜かなる書房内の、などそれ〳〵相異つて居る。併し小兒は其襁褓裡の言語を脱せんければならぬと同じ

く、宗教に於ても其女性的言語は進歩して男子的のに遷り行かねばならぬ。併し此際は必ず抗爭が起る。此抗爭は間斷なく復起するもので、之は己れを回復せんとする消すべからざる欲求である。而も之は又宗教をして全然的衰頽に陷らしめぬやうにする效用を有て居る。此等兩極の間には最初より最終に至る迄不絶動搖があつて、一進一退若し一極の引力が餘りに強くなる時は健全なる運動は中止せられ萎靡沈衰を來す。或る宗教が若し一方には小兒の能力には適しながら他の一方には大人の要求に應じ能はぬやうな事になると、若しくは其反對の場合でも、其宗教は既に活力を失つて居るのである。かくの如くんば、其宗教は迷信となり了するか、然らすば只の哲學となり了するのである。

之を要するに、私が、一切の宗教には眞理があると云ふのは例へば、天空てふ神名は物質的意味で解しては全く虚妄だが、高尚なる意味で用ゐられてあると見れば正眞であると云ふのである。前述の如く實際上の心的過程に於ては、決して、神の觀念と天空とが同一物とせられたのではない。そんな事は不可能である。かゝる名は神の顯著なる方面の少くとも一部を接近的に若しくは比喩的に表示したものに過ぎぬのである。かゝる名を作つた御當人は其當時物質的の天を意味せしめたのではなく、今日の吾人の所謂天國と同じ程の意味をもたした積りであつたらう。

さて又古宗教は大抵奇怪荒唐人を驚かす底の性質を有つてゐるが是も古語の性質をよく腹に入るれば全く理解し得られるのである。古語は Synonym（シノニーム）（同義語）に富むでゐる。正しく云へば Polyonymous（ポリオニマス）（多名的）である。近世語こそ殆んど一物には只一名があるのみなれ、古の希臘語、アラビヤ語、梵語等に於ては同一物に其異名頗る多し。但しこは怪しむ

には足りない。蓋し其各の名は其物の一面だけの性質を表はしたものであるから、若しも其一方に偏してる名に不滿足を感ずる場合にはいつも新名を作るのである。故にいくつも〳〵名が出きる。それが時を經るに從ふて其内で特殊の目的に適ふやうなものは保留されて後まで殘つて行く。例へば天空（ソラ）は「光れるもの」のみならず或は「暗きもの」とか「蔽へるもの」とか「雷鳴するもの」とか「雨降らすもの」等の名が附くのである。之れは言語上で所謂 P.lyonomy（ポリオノミー）（多名語）と稱せられ宗教上では Polytheism（ポリテイズム）（多神教）と稱せられる所のものである。然るに無限者に向つての渴仰は先づ之を「光れる空」と呼んで滿足した。處が又此同一の渴仰が場合によつては其神を天空の他の名、例へば「暗き空」とか「畏ろしき空」とか「全能の空」と呼ばしめる事がある。ヂャウスの外にヴルナが出來たのは全くこういふ風であつたのだ。それが後には分れて全く獨立の神となつてしまふ。かくて段々多くの神ができるけれど、神の圓滿と無限とを言表はすにはどんな名を持てきても不適當で不完全であるから、苟も神に近似せるものは天地間に於けるありとあらゆる盡くを採り來りて遍在者の名とするやうになる。暴風に於て神聖者の存在が見出されれば暴風、地震や火焔に於て認められれば地震や火焔が何れも其名とせられるであらう。

されば多神教及神話の發生豈怪むに足らんや。蓋し免るべからざる勢である。之れは宗教の幼稚語（パーレー アンファンタイン）（Parler enfantin）である。併し世界には小兒期があつた。小兒の如く語り、考へ理解する時代があつた。其言語は其時代に取つては眞正のものであると同樣に其宗教も其時代に取りては眞正のものである。然るに大人の語を以て小兒の語を解せんとし、古代語を其文字通りに、卽ち近世語的に東洋語を西洋語的に、詩歌を散文

的に解釋するならば如何であらう。其誤りは解釋する吾人の方にあつて、決して解釋される彼の方にあるのではなからう。今日にありては舊約書の「エホバの口、唇、息」などを其文字通りに解する輩はもはやあるまい。

Per questo la Scrittura condescende
a vostra facultate, e piedi e mano
attribuisce a Dio, et altro intende

Dante 'Paradiso' IV. 4446.

（されば聖典は、我等の力に　ふさはしく、ものせるなれ。
神に手足のありとし書けるも　其儘の、意味ならじ。）

とはダンテの句、さても宜なる哉。

然り古代の言語は小兒の言語である、しかも吾人若しなまじゐに之を排して一層抽象的な名辭を用ゐて、無限者神聖者に到達しやうとするならば、是れ梯して天に上らんとする小兒に類しはしまいか。

宗教に於ける幼稚語は決して化石ではない。又亡びるものでない。永久亡びる氣遣がない。我等の目には十九世紀の眞畫中にうろつく所のMegatherion（地質時代の怪獸）としも見ゆる印度の宗教にばかりあるのでない。新約書中にも澤山ある。耳で聞いたばかりではわかりつこのない、どうしても心胸で會得せなけりやならぬ底の比喩はいくらもある。

古代宗教に存する所の、恐ろし忌はしと見ゆるやうな事柄も、慈悲の眼光で解釋すると、其決して、然らざることが見出される。例へばバビロニヤの至高神 Belus が自らの頭を斬て其血と塵とで人間を作つたと云ふ譚は、本來、人間には神的生命の素質が存して居る、吾等人間は、神の

血統に屬して居る、彼の子孫である、とほどの意味を表はしたに外ならぬのである。古代埃及の宗教にも同樣の觀念がある。太陽が己れを傷つけて、其血の流れから物を作つたと云ふが、是もバビロニヤのと同樣にかの創世紀に「神は人を地の塵より作り其鼻の穴に生命の息を吹込めり」とあるのと其眞底の意義に於ては毫も異なる所はないのである。

メキシコの國では、Huitzilpochtli（フイチルポクチリ）と云ふ祭の日には、小兒を犧牲に供へ其血と或植物の種とを混ぜて神の像を造る、祭の終になると一人の僧が來て此像を矢で射貫く。そして王樣は其心臟の處を喰ひ、餘の部分はそこらに來てゐる群衆に分配する。甚殘酷なる習慣である。が此神を喰ふといふ習慣も元來は象徴（シムボル）として工夫されたものであつたのだ。然るに後になつて、其眞の精神的意義は忘失せられ、其僞りの、物質的意義が殘りて、物質的の神を現に食ふ事になり、殘酷なる呪物崇拜に陷つたのである。（Wundt, 'Vorlesungen über Menschen-und Thierseele. V. II. P. 262 ヴント氏「人間及動物の精神に就ての講義」參照）同一の慈悲の眼は他の諸宗教の典籍にのみならず、吾等自身の聖書にも與へられんければならぬ。所謂豫言者の言說、律法なんどは若し之を文字通りに解釋したならば難點は夥しく現はれ出づるであらう。併し若しよく古代の言語及思想を史的に了解する者から見れば此等の難點は聖書の眞價を疑はしむる材料とはならぬのみならず、却りて其時代に於ける純粹正眞のものたる屈强の證據となるのである。

而して我等自らの聖書に與ふると多くもあらず少くもあらぬ丈の慈悲を他の諸宗教にも許しやるならば、過ぐる三百年の其間、非歷史的見解の爲めに蹂躪し盡されたる所の彼の諸宗教の眞面目は燿然として露はれ來り、其眞價値、眞地位は着々として恢復される事であらう。

マクス、ミュラー　宗教學綱要　終

附錄

(一)

ポリネシヤの神話に就て

(ギル氏著「南大平洋諸島の神話及歌謡」Gill's 'Myths and Songs From the South Pacific' に序す)

人類の解釋に二个の相反せる見說あり。一つは向上的にして一つは向下的なり。一つは、人間の思想は其原始にありては簡素朴純なりしが、後に、腐敗し墮落したるなりとし、一つは、原始人は動物に僅に一歩を進めたるものに過ぎざりしが、後漸次に發展進化したるなりとす。而して宗教に關しては甲は曰く、人間の心內には原始よりして、一つの超自然、無限、神聖、過境的なる或者を渴仰する素質存すと、乙は曰く、人性は最初

にありては純乎たる動物的受動的のものにして、環界の諸印象の爲めに所謂自然的過誤(ナチュラルミステーク)に陷り、玆に呪物崇拜、祖先崇拜、動物崇拜、天然崇拜等が發生し來るなりと。

此等兩說は、或意味に於ては共に眞理を有す。唯其何れかの一により て一切を概括し去らんとする時、何れも共に非眞理とはなるなり。宗教の眞の起原に就て確乎たる斷定を下し得る時期は未だ到來せず、恐らくは盡未來際到來することなけん。勿論吾人は今日、初期宗教に關して若干の斷片的知識を有せざるにはあらず。而かも、そを推究し行けば、常に必ず尙一層初期のものゝ存せしを豫想せずんばあらず。

或は曰く最初の宗教は呪物崇拜なりしならむ、何となれば此崇拜は既に動物に於ても見らるゝ所なればなりと、されど、呪物崇拜とはそも何ぞや。一つの樹、一つの石、一つの杭若しくは一つの動物等人間の想像(ノーション)が偶然に選取したる或一物を暫時崇拜するの謂ならむ 是れ果して最初の宗教なるべきか。請ふ先づ記臆せよ、宗教と崇拜とは別なり、兩者は必然的に結合せるものにあらず。されど今一歩を讓りて、之を然りとせんも、苟も一つの石を崇拜すると云へば、之を崇拜する者の心にては、所謂其石は、只の一つの石にはあらで、夫れよりもより多くの或者、卽ち超自然的なる神聖なる或者ならざるべからず。故に一つの石の崇拜とは、一つの超自然なる神聖なる者に向つての信仰の外的發表の謂なるなり。されば超自然、神聖等の觀念は呪物崇拜より出て來るにあらずして、劫りて、呪物崇拜は此等の觀念を豫想せるなり。必しも常に然りとはすべからざらんも、一般には然りとして不可なかるべし。是れと同樣に、又祖先崇拜は不死の觀念、家族は理想的一躰なりとの思想、及、死者の魂は神と同等の尊敬を價すとの信仰を豫想せるなり。

×呪物崇拜の名は De. Brosses（ブロッセス）氏の始めて用ゐたる所なるが、此語ほど意義の漠然なるは他の學語中其比を見ず。

今日吾人の有する知識の範圍より之を見れば、凡ての宗教は呪物崇拜に始まり凡ての神話は祖先崇拜に始まると云ふは嘘（ウソ）なり。世には呪物崇拜あり、祖先崇拜あり又天然崇拜もあり。然り唯是等があるのみ。是等がありと云ふことよりもより多くの何者もあるにあらず。されば吾人の先づ勉むべきは、宗教、神話、崇拜の各形式を區別し分類して、其發展、盛衰の段階を調査し、之を社會の各層各級の中に追究するにあり。而して出來得べくは、特に彼等自らの言語にて研究せざるべからず。若し夫れ言語は果して思想及感情の發表なりとせんか、宗教的思想及感情を含有せるものの正しき了解は、必ずや之を言語の正しき知識に待たざるべからざるや論なけん。

宗教及神話に存する不合理的部分は言語が思想の上に與ふる感化によりて說明し得べし、とは予が屢々唱導したる所なり。されど是を以て其凡てを說明し盡すを得べしと云ひしにはあらず。唯神話の或部分は此方法によりて說明し得べしとなし、已に屢之を試みたるのみ。蓋し神話は、全躰としては、人間思想發展の途上避くべからざる或一時期を代表せるものにして、從つて其時代の一切の人心內の或範圍を包含せるものなり。神話の一部は宗教なり、一部は歷史なり、一部は詩歌なり。されど神話は全躰としては、宗教にもあらず、歷史にもあらず、はた詩歌にもあらざるなり。神話は此等一切を包括す。但し其發表形式は其時代にのみ自然的且つ可解的にして、そが傳說となるに及んで、不自然的且つ不可解的とはなる也。之と同じく天然崇拜、動物崇拜、英雄崇拜、呪物崇拜等何れも皆、宗教の一部なるには相違なし。されど其一をのみ擧げて宗

教の起原若しくは發達を說明せんとするは不可なり。何となれば、發達の諸方面に於ては啻に此等凡てをのみならず尙より多くを包含すればなり。

さて、ギル氏の此著は學者に戒心を與ふる點に於て無比の益あるを見る。此書は Mangaia（マンガイヤ）の宗教及神話の記述なり。（マンガイヤは Hervey（ハーヴィー）群島に屬す。こは南太平洋上の一群島にして、南緯十九度より二十二度、東經百五十七度より百六十度の間にあり。）

先づ、ポリヲシャの宗教、神話が諸種の形を爲せることは頗る面白しとす。各島何れも夫自身の宗教的及神話的言語を有す。但し其內、凡てに共通のものあり。こは極めて古きものたるは明なり。ギル氏によれば、マンガイヤ島は他島に比すれば他國の感化を受けたる事最も少しとぞ。是此書に大なる價値の存する所以なり。マンガイヤの說話と猶太教、基督教及其他の諸古譚との間に一致あるを見る時、吾人は、こは歐人の旅行者が其種を蒔散したるにあらずや、若しくは宣教師等が自ら潤色したるによるにあらずや、と疑ふを禁ずる能はざるなり。ギル氏は特に此點に注意し、かゝる患なからしめんと勉めたり。氏は本書の編輯の間は一切他國の說話を遠け居たり是れ無意識的着色を避けんとなり。以て共用意の周到を見るべし。

ポリヲシャの傳說中（Selec ed Essays vol. II. p. 456）に Eve（イーヴ）（Ivi（イヴィ））の話あり。之は氏によれば、此地の或者が舊約書中の譚を聞きしことありて、夫れを自說に混入したるなるべしとなり。

又有名なるポリヲシャ神話の太陽英雄 Mani（マウイ）が顎骨を以て其敵を擊つの譚もマンガイヤにはあることなしとぞ。

右の事共は鎖々たるに似たれど、神話研究の上には重要なりとす。不

合理的なる若しくは、馬鹿〳〵しき樣の事柄が二個の神話に於て相一致せる時、此二神話を同一起源と見るの說は最早破られざるべからず。何となれば若し夫れ顎骨が武器として用ゐらるると云ふ事の理由が一つの地方に於て存し得べしとせば、同一の理由は他の地方にも存し得べければなり。よし、其如き理由は存せずとせんも、甲地に於て起りし若しくは起りしと假定せらるゝ事實は、乙地に於ても起りし若しくは起りしと假定せらるべければなり。かゝる一致に、始めて出會ふ時は、吾人は同一起源說に心引かゝるを免れ得ざるの感あり。さはれ、此類のものを見る事屢々なるに及んでは遂に之に左袒する能はざるに至るなり。

マンガイヤの說話の地獄は Avaiki 又は Aviki と名づく。人はそが佛教及バラモン教の地獄の一つと同名なるに驚かんとす。さはれ Tahitan 島にては Hawaii、Newzealand 島にては Hawaiki、と稱す、(予の考にては Sawaiki なる名は一層古きものならんか)かく見來れば結句、梵語とポリヂシヤ語との間には何等の類似もあらざるなり、

マンガイヤ神話の太陽英雄を Ra と名づく。之も又埃及のと奇怪にも一致せり。さはれ尙注目すべきは、其ラーが擒となる譚なり。此此のものは希臘獨逸ペルー等其他の神話に多く見らゝ所なり。(拙著、獨逸工場よりの屑片 Clips from Germanworkshop2nd ed. vol. II. p. 116 參照)

又マンガイヤの說話に、Ina(月)が其戀人の老ひて弱くなれるを地上に送り返したる譚あり。是れ希臘神話の Selene と Eudymion の譚、Eos と Tithonos の譚を想起せしむ。又ヱーダ神話の Maruts (擊者、嵐神)が終には羅馬の戰神 Mars となりたる漸次的遷行の縱蹟を知れる者は、ポリヂシヤの多くの神の內、嵐神、戰神、破壞神等の間の關係を見て、誰かは、人間思想の過程の、何處に於ても同一なるを認知せざるを得むや。但しポ

リチシャの神名に Maru なるがあるは畢竟偶然の類似ならなくのみ。

ポリチシャの傳說には、大洪水が四十日間、打續きたるを云ふ。此驚くべき一致は如何に說明すべきか。或は宣教師等の感化に歸し得べきか如し。されど只此一事を以て、俄に其同一起源を云ふべからず。偶然の一致なるやも知るべからざれはなり。況んや或は、野蠻時代には今日の吾人の知らざる一種の天文的計算法の存せしに由るなきを保すべからざるをや。但し玆にはアメリカの傳說にも類似のものあることを引合には出すべからず、そは西斑牙人より傳はりしなるやも知るべからざればなり。併し此他 Toltec 人の洪水說話、及其時、山が十五キュビット尺の深さ迄蔽はれたりとの譚の如きは圖らずの一致と云ひ得べけむ、(Bankroft 氏 'Natve Racos,' V. 5. p. 20 參照)

又 Chimalpopoca の稿本によれば、造物主は第七日に於て塵と灰とを以て人間を造るとあり。第七日とは驚くべし。さはれ此七と云ふ文字に、さまで重きを置かで之を見ば、吾人は寧ろ其驚く者を、驚かむとす。そは、印度の洪水說話と猶太の夫れとの一致は尙甚しきものあればなり、否雷に此二國間のみならず、其他の國々にも這の種の類似は頗る多し。若し夫れ、是を以て皆其同一起源を云はゞ、其各の間の差異は如何に說明せらるべきか。但し玆に唯一つの驚くに耐ゆべき事あり。印度の傳說には、洪水が、Manu に豫告せられて後、第七日目に於て始まれることは是なり。されど、此第七日と云へる事は只 Bhagavata Purana の書にのみ見ゆる所なれば恐らくは偶然の一致ならむ、然るに或は云ふ、是れ印度人が猶太若しくは同教より採り入れたるにあらずやと、されど印度人がかゝる一小鎖事をのみ採り入れて、重大なるは、多事を逸したりとは頗る怪むべきにあらずや。(こは學者の注意迄に因に記し置くなり。)

さてマンガイヤの說話を讀むに、其何れもが、皆言語に由來せるものなるを思はしめざるはなきなり。マンガイヤ人が言語を弄するなるか、はた、言語がマンガイ人を弄するなるか、そは何れかなるべし。ギル氏も亦之を認むされど氏は、一切を擧げて之に歸し去らんとするは不可なり、之れ鐵と鏽とを混同するの類なりと云へり。

玆に神話研究上特に注意すべき一大事あり。他なし。抽象的若しくは哲學的性質のものは皆次位的若しくは後代的の者とする事是なり。かくの如きは蓋し多くの場合に然るは否むべからず、而も必然的なりとはすべからざるなり。蓋し神話の主なる源泉の一つは原因探求の欲望にあるなり。可見的を不可見的にて解釋せんとする欲望、卽ち、經驗以外に超出せんとんとする衝動にあるなり。アールヤ族にては人間の思索は俱象的のものに關する疑問に始まり、先づ空、日、月、風等が神として寫象せられ、其の後、抽象的の觀念に遷り行きたるを見る。されど、アールヤ族の或者、特に印度人にては、最初よりして、超自然に關する哲學的思想の起らざりしとは確に斷言し得べからざるが如し。又かしこにては神話的思想の二潮流卽ち、形而上的のと物質的のとが長くは並行することなく、やがて一つは哲學となり一つは宗教及迷信の材料供給者となれりしとも斷言し得べからざるに似たり。

扨マンガイヤの傳說によれば宇宙 (Avaiki) は耶子の穀の形をなし、一つの太き莖の上に位す。其莖は上方に行くに從ひて漸次に細くなり行きて終に點をなす。此點は人間とは異なれる形の鬼にして、名を Te-aka-ia-roe と稱す。「一切存在の根」の義なりとぞ。之を讀めば身は宛然ブラトマナスやプーラナの中にある思あり。次に此點の上には Tetan-gaen と名づくる鬼あり。「呼吸」の義なり、次に Temanava-roa と名くる鬼あ

り、「長生者」の義なりとぞ。凡て此等を讀めば皆抽象的、思辯的、組織的の響あり、從つて後代的に聞ゆるなり。實に或は然らむ、而かも何故に然るや、何故に然らざることはあり得べからざるか。曰く何等の理由なきなり。唯其然るを知るあるのみ。

次に進んで耶子の殼の內部に入れば、其の底に一老女あり。肉と血とより成れる鬼にして。Varimatetakave と名つく。「トッ始め」直譯すれば「始又底」の義なり。但し彼の女自らは只の抽象にはあらず。云ふ彼女は其自らの左の腹の一切れを摘出せしに、其の一片は最初の人間となれりと。而して此最初の人間に就て種々の說あり。彼は半は人、半は魚、一眼は人目、他眼は魚目、右腹に腕あり。左腹に鰭あり。一脚は通常の形をなし他の一脚は半より魚尾をなす。又彼には兄弟もありて、彼は純然たる說話的性格を具せり。されど彼は其の始めは天空の表示なりしや明なり。彼れの名は Avatea Vatea と云ふ。午の義なり。物語は云ふ、ヴテァは二の大眼を有す。但しそが同時に我等に見らるゝは稀なり、其一眼は通常人間の呼んで大陽と稱し、此處天界に於て見らるゝ所のものなり、他の一眼は月と稱しアヴィキ(下界)に於て照るとこは固より、只の神話にあらざるなり。然るに他の神話によれば、日と月とはヴテャの兩眼にはあらずして、共に活ける生物なりとせらる。而も何人も此二神話の互に矛盾せるを訝ることなし。蓋し是等は人々が之を理解し得たる間は眞實なりしなり。そが不可解となると同時に神聖とはなりしなり。

上述の如く不確なる事、實に夥し。呪物崇拜、祖先崇拜、若しくは神話全躰をば言語の疾病と見做さんとする者よ。來りて、先づ、自家の說を此マンガイヤの傳說に就て檢試せよ。是唯、世界の全宗教及神話の一小片に過ぎざるなり。而かも自說は之をだに包括し能はざるを見ん。何ぞ況ん

や、全宗教及神話を説明し盡さんとするをや。

附錄（二）

ホッテントット人の神話

（ハーン博士著「ツイゴアム、コイコイ人の至高實在」Dr. Hahn's 'Tsui-goam, the Supreme Being of the Khoi-khoi' を讀む。

Hottentot（ホッテントート）或は Hüttentüt（ヒュッテントット）てふ名は和蘭人が喜望峰に於て初めて見たる黄色人種に附したる名にして、蘭語にては「吃」（どもり）の義なり。Dapper（ダッパー）氏によれば此土人の言音に一種奇異なる急（クリック）、喉（アンド）、聲（ハーン、サウンド）ありしによるとぞ。又和蘭字典 Idieticon Hamburgens には「藪醫者の綽名」とあり。兎に角、こは土民自が稱する名にはあらず、彼等は自らを Khoi-khoi（コイ、コイ）即ち「人間中の人間」と稱し居れるなり。かく稱するは己等を Bushmen（ブッシュメン）(Bojesmen) と區

別せるにて、彼等は之を ハーン と呼び犬よりも劣れる者となせり。されどハーン氏によれば、此二種族は元來同一族にして、言語も同じく、只前者は農業を、後者は狩獵を生業となしゝの差ありしに過ぎず。然るに後に及んでブシメン中には方言數多生じ、終に互に相通ずる能はざるに至れりとぞ。コイコイ語にては語根は皆單綴音にして必ず母音にて終り、代名詞的接尾語によりて文法上の諸變化をなす。然るにサー語にては語根は多綴音なるが多く、此語は全躰より見て、聲音學上の墮落及文法上の混亂著しとなす。ハーン氏は此兩國語を梵語と英語とに比せり。當らざるにあらず。

コイコイ語には數詞もあり。十進法にて秩序あり。ブシメンは從來、二若しくは三以上を數ふるに耐へざる人種なりと云はれたれど、ハーン氏によれば Aibushmen には二十迄の數詞はある由なり。

コイコイ人の奇習として記すべきは、男兒を呼ぶに母の名を、娘を呼ぶには父の名を以てすることなり。長女は最も尊ばる。梵語の Duhiter（娘）は本來は「乳搾り」の義にて卽ち Duh（乳搾る）より來れるにて、希臘語の θυγατηρ も英語の Daughter 等も是より出たるなるが、女子の地位の相同じきは面白からずや。今ハーン氏の引用せる一小歌を譯出す。歌に曰く、

我れの女獅子よ、
汝は我が汝を誑さんと恐るゝや、
汝こそは軟かき手もて牝牛の乳を搾るなれ。
我を嚙みませ（接吻せよ）
我が爲めに乳注ぎませ！
我が女獅子よ！
大ひなる人の娘よ！

（直譯）

ハン氏によれば彼等は愛らしき性質を有し毫も忌むべき所あるこ
となしとぞ。

却説、彼等の宗教は如何のものにやあらむ。

抑も、之を現時の希臘羅馬の研究者に見るに、彼等の多くはホーマー
の諸神及其神話英雄(ヒーロー)の眞の性質を知るに困しみ、而して名稱語句の眞
意義に關しては殆んど何等の確說をも與ふるに耐えざるにあらずや。
見るべし言語の研究が如何に神話學上に必要なるかを、況んや野蠻人
の宗教神話に關してをや。之を研究せんとする者に取りては、蓋し其言
語の知識は絕對的に必要なりとす。從來の報告者の多く信憑すべから
ざる所以のものは重に此知識の缺乏にありて存するなり。

Tylor(タイラー)氏は多數の宣教師及旅行家等が齎らし來れる言語、宗教、傳說に
關する報告の大抵誣妄なるを指摘し、多く其證例を集めたり。其中に次
の如きがあり同一の人種に就て、或牧師は曰く、彼等は一つ若しくは多
くの神を崇拜すと。而して他の牧師は曰く、彼等は神てふものに付ては
何等の觀念も、はた、名稱をも有せずと。而して最も笑ふべきは同一人に
して前後矛盾の言をなせることなり。例せば Sparrman(スパールマン) 氏は、其著書の
或處にては、ホッテントートは果して至高神の信仰を有するや疑はし、
何となれば彼等は自ら「我等は痴鈍にして何事も知れる者にあらず、最
上神の事の如きは嘗て耳にしたる事なし」と云へるに徵して明なりと
述べ、而かも他の處にてはコイコイ人も一つの最高實在の信仰を有す
と認めざるべからず、彼等は、之を以て强悍なる惡魔の如きものにして
風雨雷霆の因て來る所なりとせりと記す。また Lichtenstein(リヒテンシュタイン) 氏は Khosa(コーサ)
Kafir(カフィー) 人は何等宗教の痕跡を有ぜずと主張しながら、彼等は世界創造者
たる最上實在を信ずとの說を認容せるなり。氏の曰く、但し Van(ファン) der

Kamp（カムプ）（一八一一死）の言を信すべしとせば、彼等は唯此實在の名稱を有せざるのみと。氏は最下等人種だも無名の實在の觀念を有せりとするなるか。噴飯すべし。

ハーン氏は土民の間に生長したる人にして彼等の言語に精通せるが故に氏の記述は十分の安心を以て讀むを得べし。

而して氏の書の與ふる效果如何、曰く、頗る吾人の主張に應援を與ふるものに似たり、過ぐる二十年間其眞否の爭はれたる學理上の原則が大に確められし所あるに似たり。

夫れ、太陽說（ソーラーシオリー）に反對する論難は埃及、バビロン、ポリネシヤ、アメリカ、及アフリカ等より集められたる材料によりて全く粉粹され了はんぬ。又何ぞ玆に精論するの要あらむ。さはれ、所謂、神話の不合理的分子は古語の誤解に由來すとの學說が、新たに此書によりと確められたるの一事は注意すべしとなす。

* * * * * * * * *

コイコイ人は其最上神を Tsui-goab（タイゴアブ）と名く。二は中央の急聲を表はす）Tsui-goam（タイゴナマ）とは是を改造したるなり。此名は、從來の報告する人々によりて種々なり。Tiqua, Thuickwe, Tuiqua, Tigoa, Tanquoa, Tsoikoap, Tshukoab, Tsugoam などあり。何れも Tsui-goab を不完全に發音したるものなり。

最初彼地に渡りたる宣教師等はコイ〳〵人は何等の宗教をも有せずと思惟したりしが、十八世紀の初めに及んで、Peter（ペテル）Kolb（コルブ）氏あり。和蘭の彼地滯在の官人 Saar 氏の言を引きて曰く、彼等は如何なる宗教を有せるか明には知られず。唯彼等は夜の明くる時早朝相集まりて、互に手を取り踊をなし天に向つて叫ぶを例とす之によりて推すれば、彼等

は神に付ての或觀念を有せるが如しと。又 Father Tachard（ファーザー タチャード） 氏を引いて曰く、彼等は世界の創造とか又は三位說などの事は毫も知ることなきも或一つの神に祈禱し居ることは明なりと。而してコルプ氏と同時代なる Böving（ベーフィング） 氏も、彼等、少くとも、彼等の中の賢明なる輩は、天地創作の神ありて雨及雷を送り、人間に衣食を給すと信ぜりと云へり。而してコルプ氏自家の經驗によれば、ホッテントート人は凡て、一つの神を信ぜることは疑なし。彼等は之を知り之を公言し神は天地を創造し之を支配し、萬物に生命を與ふるものなりとす。而して尙此神は彼等の云ふ能はざる性質を有せるが如しとぞ。

ツイゴアブてふ名を最初に記したる人は Schmidt（シュミット） 氏なるが、氏によれば、プライアデス星（Pleiades金牛宮の背邊の星群）の歸り來る時は土民は祭を行ふ。此星東方の地平線上に現はるゝや否や、母は子を腕に載せて高處に走り行きて、彼の星を指し、其方へ小兒の手を延さしむ。かくて一村の民は古來の習慣に從ひて、相集りて踊り歌ふ。其合唱（コーラス）に曰く

「オヽ、Tiqua（ティクア） よ、我等の頭上の我等の父よ、我等に雨を與へよ、Nientjes（ニエンチェス） 果樹の名）の實熟して食物（たべもの）澤（ゆたか）ならん爲めに、善き年を我等に贈り玉へ」

チクアはツイゴアブの轉訛なり。Schulemen（シュレーメン） 氏譯の Namaqua（ナマカ） 語の聖書には此語を神の義に用ゐたり。但し現時の土民の基督教信者間にては此語の代りに Eloh（エロッブ） と呼ぶべく教えらる。こは Elohim（エロヒム） の訛なり。

ハーン氏も數個の讃美歌を載す。吾人は之等を讀んで宛然、韋陀讃誦（中に入るの思あり。而して蠻人の簡素朴訥なる贊歌も畢竟するにアーリヤ人の夫れと大差なきを感ずるなり。今其一を譯出す。曰く

汝、オヽ、Tsui-goa（ツイゴア） よ、
汝、諸の父の父よ、

汝は(我等の)父なり。
雷雲を流さしめ玉へ、
我等の家畜を生かさしめ玉へ、願くは
我等をも亦活かさしめ玉へ、
我は實にいたく弱り果てぬ、
飢の爲めに、
渴の爲めに。
オヽ願くは、我は野の果實を食ひ得んことを
汝は我等の父にあらずや。
諸の父の父よ
汝、ツイゴアよ、
オヽ願くは汝を讃し得んことを、

我等は汝に報ひ得んことを、
汝、諸の父の父よ
汝、オヽ、ツイゴアよ、

次に吾人は此ホッテントットのゼウス若しくはインドラとも云ふべき者の性格を觀察せんとす。請ふ暫らく、バーン氏が老ひたるナマクア人となしたる會話を聞け、

突然として雷雲の地平線上に現はれ出でし時、かの老人は、豫め必ず數時間内に降雨のあるべきを算定して曰ふ、アヽ、其處にこそツイゴアブは我等の祖父の時代のと同じ昔しの姿にて來るらめ、今日はやがて雨降らむ、而して地面は Tusib (ツシブ) にて蔽はれむと。余は其ッシブとは何の義ぞと尋ねしに、答へて曰く雨後始めて綠の草の見え、又は早朝、光れる綠色が地上に廣がれるを見る時は、我等は「ッシブが地を蔽ふ」と稱する

なりと、

こは、サムエル後書二十三章四節の「日の出の朝の光の如く雲なき朝の如く又雨の後の日の光明(カヾヤキ)によりて地に茁(モエ)いづる若草の如し」を想起せしむ。

右はツイゴアブの自然的及詩歌的方面なるが、此信仰は又實踐的方面の上にも感化を與へ居るを見るなり。バーン氏記して曰く、嘗て旅して路に迷ひ、水乏し、速に水を得べき所に至るにあらずは又明日を見ること能はざらんとす。此時余は案内者(ガイド)(Habob族の一人なりき)を叱して曰く、汝は何をなしたるぞや。明日は我等はJackals(ジャカル)や蒼鷹の餌食とならんずらん。アヽ、誰かあつて、此困難より我等を救ひ出さむと老人は冷然として云ふ。ツイゴアブ我等を助け玉はむと。かくて朝の九時頃、水ある所に達するを得、水を飲み烟を喫し、具さに前日の難を語りけるに、彼か曰く、昨日は我れ旦那に殺されんとせしに、主は幸に之を妨げ玉へり。旦那は今は、主の我等を救ひ玉ひたるを御合點なされしやと。

以上述ぶる所によれば、ツイゴアブは多くの點に於て開化人の思想及言表と類似せるものなるを看取し得ん。卽ち超自然力の指示は、大なる天文現象、特に太陽の力及びそが人間及自然の生活上に與ふる所の恩澤に於て見出され、而して其超自然力を呼ぶに此自然現象の名を以てせることとなり。されば、ツイゴアブとは元來、天空、若しくは、昇る太陽、若しくは、注ぐ雨、若しくは雷、の名なることは、之れ最も自然的にして毫も怪しむに足るなし。凡て此類の名は所謂太陽神(ヂーツー)若しくは天上神(ゼレスチヤル、デイチー)に於て共通燒點(コムモン、フオーカス)を有す。ジユピター、ヴルナ、インドラ、Thor(トール)の如き何れも皆然らざるなし。此點に於ては吾人は些の解し難きものあるを覺えず。

されど吾人は今や此等話譚中の所謂不合理的分子を觀察せんとす。

空、太陽、雨、雷の神―最上實在とせられ居る所の此ツイゴアブは又他方に於ては、甚奇怪なる話譚の主人公たり。話譚は曰ふ。彼れ、もと膝に傷もてる藪醫者なりきと。Appleyard（アプルヤード）氏によればホッテントットの Tsoei-（ツオイ）koab（コアブ）をカファー人は u-Tisso（ウ・チソー）と呼ぶ。もと數代以前のホッテント或はナマクア人中の一つの有名なる醫師兼妖術者にして膝に傷受けたるものゝ名なり。彼れは其存命中非常に强力なりしかば死後にも尙彼等は彼れに保護を祈れりしが終には殆んど神となれりと。又博士（モフファ）Moffat 氏によれば、氏嘗て大ナマクア地方に旅行し一つの老醫兼妖術家に遇ひ其語るを聞くに、曰く、ツイゴアブは大力の兵士なり。嘗て他の酋長と戰ひ膝に負傷す。されど後、敵に打勝ち、其名は消失せぬ。そは誰もツイゴアブ（傷ある膝）を敗る能はざればなりと。余は、彼等がさしもに、創造者、恩人として崇むる者の、かゝる「惱める者」若しくは「痛き膝」などの如き名を有せることの甚不似合なるを咎めしに、答へて曰ふ。此名は惡魔若しくは死を呼ぶに用ゆる名なり。余は實に死は眞に痛きものと思ふなりと。

又ハーン氏が Habobemann（ハボベマン）といふ老人より聞きたる所によれば、ツイゴアブはコイコイの有力なる酋長にして實に凡てのコイコイ族の祖先と仰ぐ所なり。されどツイゴアブとは本來の名にはあらず。彼れの部下の多くが嘗て、他の酋長 Gannab（ガンナブ）といふ者に殺されしかば、彼れは是と爭ひしに、ツイゴアブは幾度も敵に負かされき。然るに戰毎に彼は强くなり來りつ、遂に敵の耳の後部をしたゝかに擊ちて之を亡ぼしぬ。ガンナブの將に死せんとするやツイゴアブの膝をねらひて一大打擊を加へしかば彼は爲めに大なる傷を負ひぬ。是よりして彼はツイゴアブ即ち「痛き膝」若しくは「傷もてる膝」の名を得たるなり。彼は跛（ナンバ）なりし故正（タダ）直（シク）は歩み得ざりき。彼れは他人のなし能はざる多くの奇しき事をなせ

り。彼は甚だ賢なりければなり。彼は來事を豫言したりき。彼は幾度も死し又蘇りき。而して彼れが我等に再來するや大馳走と大歡喜と起りき。各村より乳は持ち來され、牛と羊は屠られき。彼は人々に多くの家畜と羊を施しき、彼は富有にてありければなり。彼れは又雨を與へ雲を作り、又我等の亂牛と羊に乳多からしむ。彼は美しき天に住し、グンナプは黑き天に住す、兩者の天は全く異なれりと。

上に擧げたるもの是卽ち所謂不合理的分子なり。吾人は自然現象を比喩的若しくは詩歌的に言表はしたるを見るも決して怪むことなし。又道德、哲學若しくは宗教上の觀念を多少誇大的に敷行したる話を聞くも毫も驚くことあらず。されど神話をして神話たらしむる所以の者は實に其不合理的分子、卽ち其不可解、背理、奇怪、荒唐なる邊に於て存するなり。ツイゴアブの譜を聞くに、或範圍までは吾人はうなづくを得、されど彼は、もと、膝に傷もてる醫者なりきと聞くに及んでは遂に驚訝を禁ずる能はざるなり。

茲にかゝる不合理的分子を說明するにでき得べき二個の學說あり。其一つは、之を以て實際ありし事實となす、例へば Daphne（ダフネ）が Phoibos（フオイボス）に逐はれ桂の木と化し去りたりとの譚を、此派の人は說明して曰く、恐らくは、Aurora（アウローラ）と名くる貴女が Robin（ロビン）てふ若者に追はれ、ふと、其處にありたる桂の木の後ろに隱れたることありしを云へるならんと。此說は Euhemeros（オイヘメロス）氏の發明に係り、近時 Abbe Banier（アッベ バニエー）氏の再唱せし所、今日にても尙全く化石とはなり了せず多少の勢力あり。他の學派の說には、曰く、神話の不合理的分子は言語が思想に與ふる感化上免るべからざる所にして、全く之に由來せるなり。故に諸神や諸英雄の譚は、其等の名稱の本來の意義だに明かなるに至らば、容易に理解され得べけんと。

試に前に擧げたる譚を例として云はゞ、此譚の如きは、ダフネは後に桂樹の名となりしも元來は曙の名なりしこと、フォイボスは太陽の名の多かる中の一つなりし事、而して太陽は其光を以て曙をばその消失する迄逐ひ行くものなること、とを擧げて說明せんとするなり。前の學說が專ら、賴む所は野蠻人等の神話にして、其神若しくば英雄は何れも元は人間にして死後、神として拜せられたるの事實を指摘せんと勉む。後の學說の主として依る所は希臘、羅馬、印度等の神話上の名稱にして、其等の字義（エチモロギー）を詮議し解剖せんと勉む。

今ツイゴアブの譚に就て之を檢するに、バニエー說は頗る有力なるに似たり。何となれば、ツイゴアブは、もと人間にして傷ある足を有てりしが、其醫術の巧なると勇强なりしとによりて死後、神位に列せられたるなればなり。天下豈之に增したる明白なる說明あらんや。但しかくては自然現象が人格化、若しくは神格化されたるにはあらで、古代の神は全く之と同一名を有する人間の祖先に過ぎざる事となるなり。

"茲にツイゴアブの「痛き膝」の解釋に移るに先ち、今一つの他の學說を擧げんとす。こはバニエー氏のと結局は同一に歸すべきものなれど其論據全く反對なるものなり。Spencer（スペンサー）氏の說是なり。氏の曰く（社會學の原理、三九〇頁）神話學者は云ふ、最初には非人格的に寫象され崇拜されたる自然力も、其名に存する或特別の性質の爲めに遂に人格化さるゝに至る。而して、此等自然力と同一とせられたる人物に關して種々の物語が後に起り來るなりと——

氏が所謂神話學者とは何處の誰を指せるにや。今の英、佛、獨、以等の神話學者は之れと全然反對の意見を抱けるなり。彼等によれば、非人格的力の觀念は人格的の夫れよりも後代に生ずるものにして、思想及言語

の初期にありてはかゝる區別は毫もあることなし。非人格的力崇拜の如きは後代に屬すと。但し今は氏の言の不精密を、咎むるの遑なし。謹んで氏の述べ行く所を聞かん、氏の曰く、

之に反して吾人の見によれば、實際の人物こそ最初の要素なれ。而して其名の同一なる爲め、或自然力(若しくは自然物)と同一とせらるゝよりして、茲に自然力崇拜が次で起り來るなりと。——

今吾人をして一例を擧げて此兩說を說明せしめよ。神話學者は云ふ、吾人の最古の祖先等が「太陽は死す」とか「太陽は夜に殺されたり」などの類の言句を發することあるは思想及言語發達の法則上避くべからざる所也。かゝる言ひ樣の結果として、輝ける神聖物若しくは半神聖物、若しくは人間が黑き敵に殺さると云ふ譚生じ來ると。而してスペンサー氏は曰ふ。決して然らず。恐らくは「太陽」と呼ばれたる實際の人間ありしならむ。見よ、今も尙 Sun, Sonne, Soleil (太陽の英、佛、獨語)と名くる人間あるにあらずや。かゝる名の人死することあらむ。或は「黑」若しくは「夜」てふ名の人殺さるゝこともあらむ。かくて其死したる後には其「太陽」君は祖先とせられ、若しくは祖先として拜せられ、若しくは神となるべし。然るに其名が太陽と同一なる爲め、崇拜及物語が其「太陽」君より、非人格的の太陽に引き移され、之に結び付けらるべしと。今氏自身の文を引きて證となす。(同上、三九〇頁)

「冬毎に美なる日光は黑き嵐に逐はれ、或は雲の後ろに、或は山の下に隱る。若し出づれば疾足と轟聲とを以て逐はるゝが故に直ちに退却するの已むべからざるに至る。然るに幾月間を經れば、嵐は漸く溫和となり、遂に烈しさも減じ、日光は前よりも明かに見らるゝことゝなる。かく日光は勇氣を回復し、其出現し居る時間を長くす。嵐は追逐の目的を果す

能はず、彼女(日光)の美を見て心和らぎ進行愈〻穩緩となる。かくて終には兩者の融合行はれ、地は濕と溫を得て喜び、二人の者より植物生れ地面を蔽ひ、美花爛漫たるに至る。されど秋來る毎に、又嵐は暴ばれ追ひ廻り始め、日光は逐はれ逃げ廻はり始む。——

太陽を女とし嵐を男とし、其合一を談ずるが如きは稍不自然にしてアールヤ族の神話らしくは思はれず、されど今は、かゝる事に付て論ずるの遑なし。尙謹んで氏の思索を拜聽せん哉。氏の曰く、

「試に Tasmanians(タスマニヤ) 人がかゝる神話を有すとせよ上述の解釋法に從へば、之れ日光と嵐とを經驗したる結果を比喩的に言表はしたるものにして、人心內に存する神話的傾向は、語の性(ゼンダー)より暗示を得て、日光及嵐を、ば甞て地上に住したる人間なりとするに至ると。——

神話學者の解釋は略〻氏の云ふ所の如きものならむ。但し彼等は此等の言語を比喩的 ——そが何か有意的人爲的の或者を意味するとせば——といはず、只自然的にして且不可避的とするのみ。且つ語の性(ゼンダー)の相違が神話思想を生ずとは云はず、唯其形成に與かり働くものとするのみ。さて所謂氏の解釋は如何。氏の曰く

「既に示したる如く、凡そ未開人が、人名を附するは其生れたる時の偶然事に依れるが多し。Mason(メーソン) 氏が記せる如く、Karen(カレン) 人には「暮」「月の出」等の名を附くる者さへあり。されば、タスマニヤの一婦人に日光の義なる Pico-ra-na-loo-na(ピコ・ラ・ナ・ルー・ナ) てふ名を有せるがあり其隣國人なるアウストラリヤ人には雹、霞、風等を名とせるがある如きも決して例外にあらず。此故に上來の推論と一貫して戾らざる推論は正に次の如からむ。曰くかゝる神話發生の第一段は、嵐及日光てふ名を有する人間の存在是れなり。而して其等と其同名の自然力とを相混同するに至るは避くべから

ざるの勢なり。其結果として、此等自然力は、人格化せられて人間的起原を附與せられ、茲に種々の冒瀆譚などを生ずべし。かゝる話譚、一度生ずれば、後次第々々に、自然現象と適合するやう改造せられ敷衍せられ行くなりと——！

今ツイゴアブの神話に、此社會學的解釋を適用せむか。スペンサー氏は曰はむとす。昔しホッテントットに一つの醫者あり。偶然の事により て膝に負傷す。其死後、祖先として拜せられ、終に最上神とせられ、雷雲の降下、家畜、果實の豊饒を祈らるゝに至りしなりと。かくて氏は此傳說を事實として肯定するならむ。否恐らくは尙一歩を進めて、ツイゴアブとグンチブの爭及其一人の膝の負傷等の譚をば、之れと相似たる譚を提げ來りて相比較せんとせらるゝならむ。氏は他宗教を基督教と比較するは危險なりとし、頻りに警戒を加へらる。而かも氏自らは決してかゝる危險を恐るゝ人ならじ。氏の曰く(四三四頁)

「西班牙人がメキシコに着したる時、土民は彼等を神と思ひ人身犧牲を供したり、との話を讀む者は必ずや、此人民の思想は、かの Odin（オーヂン） 神に己れの子を献げたるスカンデナヴヤ王 On（オン） の思想と相似たらずやと問はむ。之れ決して無理ならじ。されどアブラハムがイザヤを犧牲にせんとしたるも亦同一思想に由るにあらずやと云ふは許すべからず。人若し、Burt（バルト） 博士が Fula（フラ） 人に其國神 Fete（フェテ） なりと思はれたる話を聞き、而して博士の仲間とフラ人との間に爭起り、博士はフラ人の酋長に打負されたりと聞かば、こは Ares（アレス） 神が Diomede（ヂオメヂ） に負けたる話と同系の譚にあらざるかと問ふならむ。是も亦至當（セツトウ）なり。されど、ヤコブ神と角力ひたる譚と同種類のものとするは甚だ非なり。さはれ、吾人苟も科學的研究法を遵守する以上はヘブライ思想をも他のと同一樣に處理せ

ざるべからず。是も亦同系の發生起源を有するにあらずやと尋究せざること能はずと——

然りスペンサー氏よ、氏何の恐るゝ所があらむ。今日は、もはや燒殺の刑は存せず。些の證跡だにあらば其信ずる所を主張するに何の憚ることが是あらむ。さはれ、要は、ヤコブと角力ひたる相手は果してバート氏の如く一个の人間なりしや。若しくは、猶太人は嘗て、しかく考へ居たりしことあるや如何、てふ問題に歸着するなり。スペンサー氏にして若し能く此點に付て何等か確證を提出するを得べしとせば、ツイゴアブがガンナブに膝を傷けられたると、ヤコブが腰骨の挫けたるとの類似は、適以て氏の說を强ふするに足るものあらむ。されど今は吾人はハーン氏の云ふ所を聞かむ。

氏は、コイコイ人は何故に、跛足(チンバ)の醫者を最高神となしたるかを怪めり。而かも、此神名の意味が「跛の膝」なることは土民の毫も疑はざる所なりと云ふ。思ふに是正に、古印度人が太陽神 Savitri(サーヰトリ) は金製の義手を有すとして疑はざりしに同じからむ。兎も角此事は決して動かすべきにあらず。是に於てかハーン氏は其字義(エテモロジー)、卽、其名の史的起原を搜索せり、氏によれば Goab(ゴアブ) は Goa(ゴア)（歩む、近づく）てふ根語より來る。Goab は動詞としては「來る彼」卽ち「彼來る」となり、實名詞としては「來る者」「近づく者」を意味す。最初は「歩行者」を意味せし此 Goab は又「膝」の意味にも用ゐらる。然るに又別に「日」特に「近づく日」の意味をも有す。Goara とは「曙す」を意味す。此他、此根語 Goa よりして多くの語出でたり。但しかゝる事は今詳述するの要なし。唯、こゝには、一つの一般的の根語よりして多くの特殊的の語の出て來れる模樣の、コイコイ語と梵語との間にいたく類似せるものある由を聊か讀者に驚かし置かんとするのみ。

却説、Goab は「朝」を意味するとせば Tsu は何を意味するぞと云ふに、一般には「痛き」の義、されど又「血の」「赤色の」の義もあり。之れ aya が元は「血の」の義なりしに今は「赤き」をも意味せると同じ。「血」てふ語が「赤」を意味するに至る由は學者の先刻御存知の事ならむ。若し tsu に「赤き」の義あること疑はしとならば tsu-xu-b は何故「夜」を意味するか、其理辯へ難からむ。xu は去るの義なり。故に tsu-xu-b は「tsu- 去れる—彼」なり。若し tsw を「痛き」の義に解せば「痛き者去れり」となる。かくては全く義をなさず。若し tsu を「赤」の義にせば「赤き者去れり」となる。是に於てか、そが「夜」の意味となること合點さるべし。

今は「痛き膝」の義となれる Tsui-goab は元「赤き曙」或は「朝」の義なりしを知らば、そが最上神の名となれること怪むに足らず(跛足の醫者にては通ぜざるも)寧ろ自然なりと云ふべし。「光れる空」ヂャウスは最上神となりしにあらずや。夫より出でたる Dieu は今もなほ至高神を意味せるにあらずや。

請ふ、更にツイゴアブの話譚は、「老醫者」に適しきか若しくは「昇る太陽」即ち「光と生の授與者」にふさはしきかを檢せしめよ。

物語によれば曰く、ツイゴアブは東方より來る。曰く、ツイゴアブは赤き天に、ガンナブは黑き天に住す。曰く、夜の明くる時、土民は「オヽツイゴアよ、凡ての父よ」と呼んで顏を東に向けて祈る。曰く、ツイゴアは復讎者なり。故に彼等は「オヽツイゴアよ、我の罪なきを知る者は唯汝あるのみ」と云ひ或は「汝の思ふまゝの振舞せよ。されど汝はツイゴアを見出さん」(こは、彼の神汝を見出し汝を罰せんとの意なり。韋陀の曙神 Saranyû が希臘にては復讎神 Erinnys となれるに同じ)と云ふ。曰く、ツイゴアブの敵は Gannab なり、ガンナブは、眠と死を送る破壞者なり。(ハーン氏は之

を。黑き夜」の事とせり)と、

かくて「赤き曙」又「諸の父の父」なるツィゴアブは後、己が種族の祖先とせられたるなり。かくて彼は一度地上に住ひし者として、又妻子を有し多くの勇行をなしゝ者として拜せらるゝに至りしなり。其所業中の最大事は、蓋し毎朝若しくは毎年行はるゝガンナブ(卽ち暗者)との戰爭なりとす。若し夫れ tsni には「赤」の意味が亡くなり、Goab も「曙」よりは寧ろ「膝」の義に用ゐらるゝが通例となれるの時代に於て、いはけなき兒孫等が、母や祖母に、ツィゴアブの話聞せよと、せがまんには、親達は子供に如何に語り聞かすやらむ。「痛き膝」てふ其名に因める譚の出つべきは豈自然の勢ならずや。

ツィゴアブと同じ運命を受けたるが、此他の名にもあり。例へば「流るゝ雷雲」の義なる Namub は神又は祖先の名となり、時としてはツィゴアブと同樣に用ゐらる。Gurub (雷)は gu (蔽ふ)てふ語より出で元は「蔽け雲」及「暗」(梵語の Vritra) の義なりしが後には前二者と同樣に一種の人格とはなれり。土民は此三者に雨及其他上天よりの恩澤物を祈る。特にグルブには人を叱責せざるやうにと祈りツィゴアブには雨と食物とを賜はれと祈るとぞ。

若し夫れ、ツィゴアブを以て實在の一老醫なりしとせんか。さらばグルブ(雷)も亦一つのポッテントットなりしとせざるべからず。ナヌブ(雲)は、一つのブシマンなりしとせざるべからず、かく云はゝ、スペンサー氏は或は、雷、電光、曙、雲等の名を有てる人間あることを指示し、以て自說を主張せんとし玉ふならむ。吾人は之を否定する能はじ。蓋し事實は小說よりも奇なり。神話——開化人の夫にもあれ、はた、野蠻人の夫れにもあれ——が語る如き奇怪なる出來事も其通りの名の人間が實際に遭逢

したる所なるやも知るべからず。かゝる事あり得ずとは斷じ難ければなり。兎に角以上、神話の不合理的分子說明の二方法中、人は其何れかを撰ばざるべからず。さはれ、バーン氏が書は我等の味方へ法馬(コンド)を投ずるものゝ如し。

——附錄終——

大正十年三月一日印刷
大正十年三月十一日發行

《定價金貳圓》

譯者　清水友次郎
發行者　高島大圓　東京市小石川區原町六番地
印刷者　佐久間衡治　東京市京橋區西紺屋町二十七番地
印刷所　株式會社　秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十七番地

不許複製

發行所　東京市小石川區原町六番地
振替貯金口座一五六八六番
電話小石川一二八
丙午出版社

前田慧雲先生著 **三論宗綱要** 定價貳圓 送料八錢

齋藤唯信先生著 **華嚴學綱要** 定價貳圓五十錢 送料八錢

前田慧雲先生著 **天台宗綱要** 定價三圓 送料十貳錢

權田雷斧僧正著 **密教綱要** 定價壹圓五十錢 送料八錢

權田雷斧僧正著 **密教奥義** 定價四圓 送料十二錢

秋野孝道先生著 **禪宗綱要** 定價貳圓五十錢 送料八錢

齋藤唯信先生著 **倶舍論講話** 定價貳圓 送料十二錢

加藤咄堂先生著 **原人論講話** 定價壹圓 送料十錢

村上專精先生著 **大乘起信論講話** 定價壹圓七十錢 送料十貳錢

境野黃洋先生著 **天台四教儀講話** 定價貳圓 送料十錢

境野黃洋先生著 **八宗綱要講話** 定價參圓 送料十六錢

392
177

終